



別本
有自
門連毛那久
逢布尔命毛
南

^13
4439
6



113
4439
16

東谷
之印

加之久全傳香籠草卷之六

江東

梅暮里谷 著

第十五

六三郎が亡霊と道行段

斯てしと福島家清兵衛が情よう。神崎の廓を出し。あつ
 るゆ六三郎と出合ひ。歎の中のものほらびひなるも多し。何れ
 間もとく。六三郎は誘ひ。戀暮の鳥夜のともく。いそぎ
 ように。道不果。敢行。西園の影。足落。き。朧月。ありと。あつ
 亡骸とも。いほく。し。も。志。め。ひ。の。目。无。さ。る。と。の。人。よ。あ。つ。と。ワ。愚
 癡。と。い。ひ。つ。り。ん。ま。ん。世。の。名。残。と。う。ま。ん。め。と。い。ふ。之。隔。て。ら。れ。し。と
 洞。川。渡。り。一。橋。を。あ。り。る。が。ら。ぶ。よ。降。り。は。罪。科。の。浅。き。縁。の
 其中。の。實。と。結。び。し。る。小。櫻。の。花。と。詠。め。ん。娛。も。也。今。ハ。稍。と。散。る

東谷
之印

花のたつらるる草の影より由。盛りの花実もせんや。くひもた
 是よたどりてふ。まて行止て跡より。伸あがりては位を曉近
 らよ驚さそく彼方の精合のよりんと。急ぎ墓所まで急
 りる六三郎ハロしよ對ひ。おん身ハ凡夫の常なれば。あつる
 工の多りり。さまてあつるふより。作しつた病ひをのぞけ。後
 得世を離る身なれば。命ハ包ひて経るなり。詳よりい祝を
 堪るさしめ。ゆくり結ばせん。這也。しつが乃ゆ急よ憂銀難
 後令生ハるるも。うまて死するも忘忌。これハおん身ハ別れ
 てより。保見岡平ハ非道の又よ救き完期。が家重代の仁
 王の刀と。おん身の代の二百両を懐より。亡命する。おん身ハ
 墓よと浅く。うまめ。後よ此世よ姿と顯り。神崎の翠簾

みる忍びくよ對目より。一子六反助も逢ひ。顔もあつる。

そのとた詳よあつる。病ひよの身よ主トおんり。便多く
 おひ。行りよ由告る。碎死する長庵も。碎死するおん身も。偽
 物とあつる。実の硯とをさす。兄長庵を殺害す。これハいひ
 詭ぶ。自害せんよ。公の真実。さけらるる。病ひ作らるる。

ちもあつる。そのサマは。六三助ハ養育も。憑りて。付さる。

ちも詮る。病ひの便り。是。実の硯も。僕部左仲次ハ所
 持も。船載重兵衛とを。清兵衛袖助ハ。いひ。

再び取く。六三助を。家も引。おと。と。幸あつる。

此。ころも。送り。劍難を。避け。成仏の時。あつる。

べき。の。多り。れ。ど。言告。鳥の。声。よ。安婆。よ。容。も。面。め

がく。非命よ死しつるれり色ど。作まる罪もあふれら
 牛頭馬頭の隔ちあり。一ッ連半坐を分て待ぶるりと
 ひよとありく煙のど。墓のうしろに漬る。しほあふ
 中しく。六云ふか夫と。向方を探ね此方を捜せど。景
 更よまふとど。當惑るもど正しく夫のち地へ誘ひ岡平
 よめよ非命の死を遂ゆひしと。細くと告げあるうへ。現
 ろく。まゆもあふとど。おつるもくも目前の墓をえくあはば。
 竹者の施主より人。弱冠又霜信士。俗名印南六三郎と名
 あり。駿さ。そのへか夫の岡平が平よあり。曾敢完期
 むひ。亡霊うくありつや。名残情のこが夫。うろりの六三
 五。そのあふと君ようれまのつとせ。月夜をうの柳巷乃

住居も。おの鳥夜のうてて。眼よるりのゆさうとど。耳よ
 づけ。ハ騒しく。あふあふく。お姿の側よありる。ゆ中しく。おん
 けいひ忘まね。新の想ひ出もせど。偶く小寝夜半の爰
 疾ひの顔のおゆく。絶入るまよとんごの熱気盗汗よ
 観の志あり。よ月寤め。夢とよろふもあり。おのゆとゆと
 月代刺て髪結ひて。願ひるど死よ手を引合ひ。笑ひあふ
 當下へ覺て悲し死爰あり。そのまよ。そのへが実岡平
 忠義神も哀まこと。お心し。良薬の毒持よて入三枝由
 おりるも。音耗もあふとと。或の恨もあふひの歎き。昨日
 よりよと待結びて。亡骸の對面するが死別まの薄き縁
 たるりのりあふと。おの筆るるるの思癡の名残も残り



か
 志久
 墓前
 自害
 三郎が
 不
 三郎が
 三郎が
 三郎が

るく。せめてくひひて別れ多か。かゝる由も是らるんよ。藤原よ
 ころれと悲しむ。岡平が隔ゆ。筋もたれてせよ。たつとも
 今更よ。こゝろあつらふも愚さよと。墓へうがと取りとる。在る
 歎き。ぬくよ。洞ろたるとい。悪人も見を。こゝろか。手は掛
 殺せぬ。適さるる大罪人。死をもこゝろ子の為ると。

人々よ。なす。〜。おしよ。ハ。重。機。

ち。く。ま。て。な。り。れ。く。名。を。残。り。り。

斯辞世代口。踊る。西方降土へ。手と合せ。南に妙法蓮華
 徑在障消滅る。さうめ。と。子の終末。由。想。を。懐。叙。

さう出。喉へ。と。突。立。て。自殺の。ゆ。で。哀。さ。る。り。後。に。ば。せ。ま
 清兵衛ハ。駈。つ。け。ど。か。く。と。の。更。よ。白。月。夜。樹。木。の。梢。よ。人。教
 あ。り。と。く。や。く。と。う。ち。ら。笑。ふ。何。さ。ま。怪。り。と。う。か。ハ。丈。長。三
 髪。あ。り。乱。し。恨。め。の。声。と。あ。げ。や。あ。ま。り。し。つ。く。ん。知。長。公。へ
 懸。想。る。を。憎。と。あ。り。て。兔。原。源。五。兵。衛。印。南。雲。右。衛。門。が
 為。よ。非。命。よ。死。し。る。高。津。家。の。侍。女。梅。戸。が。寛。寛。たり。
 づ。く。ん。が。想。ひ。の。届。さ。る。も。兔。原。印。南。の。両。家。の。妨。げ。よ。う。さ。る
 る。れ。が。汝。ホ。が。親。族。を。絶。し。憤。怒。の。ま。ま。ひ。と。晴。ま。ん。と。知。長。公。の
 令。国。を。と。め。汝。ホ。が。一。類。を。非。命。よ。死。し。む。も。比。自。こ。ろ。ん。か。所。為
 こ。今。汝。を。殺。せ。し。く。い。な。半。半。ハ。お。是。り。と。れ。ど。所。詮。成。仁。の。化。を
 ぬ。る。こ。ろ。の。か。ろ。ん。ぬ。悪。疑。這。上。由。黄。泉。の。鬼。と。ま。り。幾。瀬。六。之。助

由時と待とくを殺し。俱に冥途のくさくさをさるるめんの公地
ゆくと罵る声は清兵衛駭き。アぢぢー様戸の今も寛
龜うせざるやと怖れたるより人をも入届なやと樹木の元へ立ちよ
様戸が寛龜の本をさるとありひか。いつかさらの情をさるや
鳴連る鶏の声も程なく東の方墓前へ伏せし正しくしと。
あるよりまよふよりて引起しえよ。オヤ自害よりされし悲
ひかりひ権く公の録言中人やんもえさく。さるめてもかむり
暮くる公根の浅うづるを便りしひ引けて別の所へ葬るも。
唐士の韓昉夫婦よひて。死しその後もあひりよりと苦勞
あらん。しつか亡骸も六三郎が墓の傍へ葬り。破中を未せよ
まご志しめるも兩位へはよ死追善と云ふありひ。かくすもひてん

りめと精舎へ高義と公さぬ

第十六 我瀬旅中疾で左仲次が為し死を段

漢都左仲次と先のと。牙よりへさ劔雅と弟太吾よりわづ。ア
牙又代り死するを僕伴と骨董補太吾と智名又紗。因別
と亡命しと伴の國より。骨董補を活費とする。志がく足せ
這地よりめ。盗む。高津家の宝硯連は詮義するは
と告るりのありれば偽の名も詳よ志しするやと。伴の國の住
居も危く。つら地の无所も定めなく。出奔し爰の國彼のらよと。
吟よ。天も低く地も狭き思ひをり。自れと公已とせめ。住居を
よべさ地もあ。東國へ富るとうく。ひや藤倉のく之。發旅
る。宝硯を手放し。栄利を圖と云ふユ。都の空も程隔り。

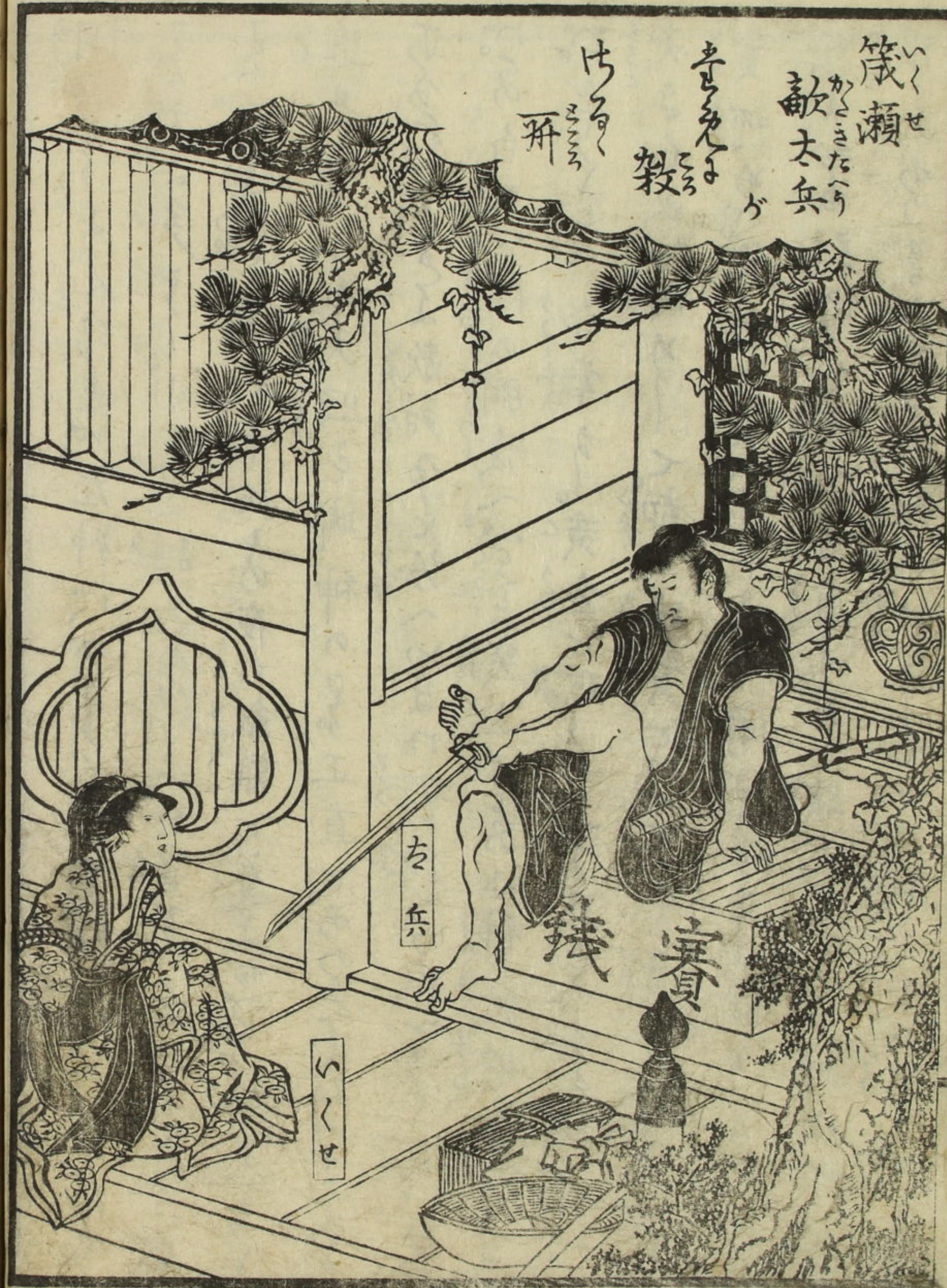
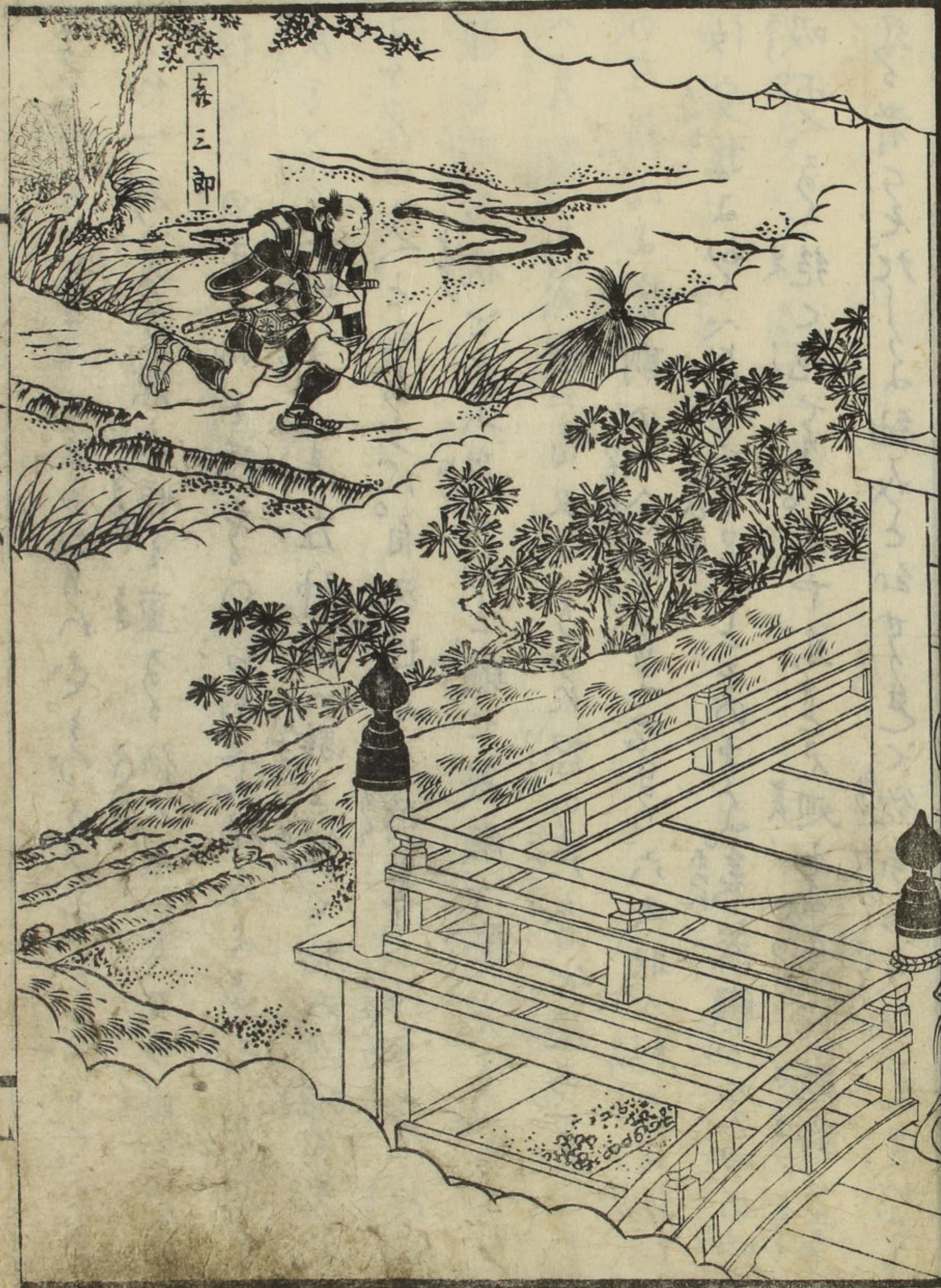
口之入

駿遠の大河も越。今や公中と海道とをめぐり同道を急ご
ぬ。是れはまがさうやく。爰は六三郎が母儀頼と清兵衛が告より
六三郎としが月の人として詳よまらして生べ死せぬあり。此世は残りて
詮るは身と狂気のまは。自教もせんと思ふ。清兵衛かき
の異見の中も六三郎助かる便あり。おぼやかる。まがさうやく死を
さす。つて。これ駿州へ立紙縁家の許よ足と止る。書通を
りて。まがさうやく。まが方へ尋ねる。傳よ六三郎の養生育もせよと
のまがさうやく。活る力とあり。おぼやかる。病の身の沈む。まがさうやく。ハハハ
今ハ便りて待侘る。清兵衛が方より幸便あり。けれど。魁
生。一。公中。と。幸よ。まがさうやく。腕の喜三郎を
おぼや。東國と。まがさうやく。つりぬ。旅中。まがさうやく。の悲傷。断腸

のまがさうやく。自。おと。身よ。あ。積。と。あり。病。と。あり。と。まがさうやく。志。の。死。
駿河の地へ。まがさうやく。持。病。の。崩。あり。と。まがさうやく。下。足。中。行。まがさうやく。
喜三郎ハ當惑の鬼やせん。くやせん。と。おぼや。まがさうやく。偶。彼。
所。まがさうやく。圓。通。の。堂。と。病。い。と。まがさうやく。よ。と。おぼや。と。おぼや。應。て
効。り。助。け。起。し。と。瀬。戸。圓。通。の。堂。へ。抱。行。懇。と。着。病。る。まがさうやく。まがさうやく。
この駿見え。まがさうやく。ひ。る。まがさうやく。女子。の。病。い。の。主人。一。位。残。と。まがさうやく。まがさうやく。
れど。貯。持。と。茶。と。朝。暮。の。病。い。と。まがさうやく。尽。ぬ。まがさうやく。人。住。家。へ。立。紙。良
茶。と。ぬ。まがさうやく。まがさうやく。行。と。まがさうやく。まがさうやく。まがさうやく。まがさうやく。
まがさうやく。細。く。まがさうやく。病。い。と。愈。まがさうやく。まがさうやく。まがさうやく。まがさうやく。まがさうやく。
まがさうやく。骨。董。浦。太。岳。旅。の。借。心。と。まがさうやく。まがさうやく。まがさうやく。まがさうやく。
祝。音。堂。と。腰。ら。切。け。まがさうやく。備。よ。まがさうやく。声。の。まがさうやく。まがさうやく。爰。所

彼所とてくあまは老女のやまひよすむ跡跡。太兵へいよ
 悪意を崩し。しやうくね老女と見ゆま。定めて費路の金
 由貯へあべし。伴當の何れへ行や。奴歸り来りたるら奪
 くらうらんと。傍へ立ちうら。旅路は誰由疾るのん。ら後も
 尚ら安らぶ。旅の情は実まで。んどもあまのあんやのまど。
 人のここのあつた。いづかや瘡もど押べし。我頼か懐へ手
 と先づれば。らこの驚きさうし死中又顔りしげ。世よ由情乃
 深きうら。いづか地の方までありなるや。目とゆらえんては。は
 ありら。も仇人るま。いよは駿と我頼の齒と咬摺らうら。
 せと是佐仲次らうら。阿女小器がうら。死しとと披露る。
 芥太兵か名と貸うけ。亡命するや。何より恨をいひ説んと。

泪のぐらよえ結ま。左仲次はうら。いと笑ひしうら。恨るま
 つか方よ多し。小園と別まのひ。これと害ま。あうら。うら。
 つか天運をどて。幸れよの夜の劔難を。身よあうら。あま
 道は退りし。天照と御神のつか正直と。ありま。あま
 あるれば。まは款對ま。は汝へいまの罰降ら。これとく罪ま。
 ば。の白又と汝の胸腹へ。ごと突ま。うら。神託貯の金もあま
 ば。をやく。や。合掌ま。黄金を破ら。うら。死ま。と。目
 尖ま。白又を閃り。て却し。踏費ま。と。責ま。突ま。
 責呵ま。我頼が衣の赤ま。と。揃ま。うら。保ま。うら。
 つかよ。引ら。と。直ま。目と瞋ま。ら。左仲次ら。
 恨ま。ありら。ま。一族ま。仇ま。て。口で殺し。手で殺し。八千ま



まで殺せしをとりしと申ありのむ。さうさう手と費して。さう
 までとあるあは悪人恨と重なる仇人を一太刀の恨もせむ。
 復て汝の手は掛り死するの口おし。袖女よ喜んたをやく
 戻すこと。呼まは左仲次の駿を慌て袖女が帰るるが。
 つかの月のとととと。白又逆手は持直。汝ホか一族の
 根を断ら枕と高の森の。聴て義瀬が脊先より。さう元
 へ君責く。義瀬の白又よりつた怒の声音と張あげて恨の
 の左仲次よ。完期の一念中有よさまり。六之助が勢より添ひ。
 汝安穩よおくべきと。言早くとそのまよ。義瀬がの世の呼
 吸のあは絶て死する。人やあはと見廻さ。息切跡跡よま
 する者らと。たしよ袖女とむすう。欲気由失ひつら足いぐ

通はあは。森三郎ハ靈丹をひと。さうさう。是中中有
 よまきるありひ。圓通堂へ駈け入る。血は降りる。義瀬の衣
 うらうらうらと。紗のねと。えさうさう。引起さ。息絶てあり
 見ば。呼ぶと喚べと。いひる。何者の仕所為やと。齒を咬と
 掌を握り。諸の。声さうさう。位敷く。中ありて。裸言ふ。これ
 附添ひありあが。別人手は失ひと。さうさう。つか手せり
 裁さる。おろろ。その言次。死せり。償うんと。と静し
 肌を脱ぎ。白又と。突まんと。さうさう。と死。義瀬が。腕元
 と。おぼし。一ツの圓火と。出。森三郎が。手は。さうさう。凝るを
 びくびく。左右へ。怒と。さうさう。今。過。空。虚へ
 つけり。狐狸の。所為。さうさう。妖怪。怖。さうさう。

終令臆と云のあれごとく。今死す身の人よ。世は怖るべき
ものあり。又もなぐり忽地と立清。と云う。と白刃と
持て。あつて。その手は。自致と云う。圓火のあつて
不得。強気の森三郎も。腕を。自由あり。証と云う
撲地と白刃と殺す。十方と云う。呆と云う。圓火の飛去り
喜三郎が耳のあつて。偶と云う。森三郎のけは倒して
岡谷と。我願が亡骸と。起す。森三郎のけは倒して
中も僕部左仲次が。非命と死す。汝居のハセ。罪を償
へん。信の女は。正し。死す。侍れども。女は。罪
源と云う。源と云う。六三郎。小室。非命の死
遂も。左仲次。平の悪。皆悉く。搦戸が。怨恨

あれ。中も僕部左仲次が。眼と。六三郎の助
と。殺さんと。幼き。神の守護のあれ
男も。近。後と。虚と。見合と。今
よ。真途の鬼と。六三郎の助が。附と。仇
あり。由。六三郎の助と。育と。森
気と。実気と。類。忠義の。報と。あ
へ。鬼。五臓へ。腎の。補と。聳
耳も。元の。悲と。早。我願が。骸
への。倒。柏子。森三郎が。耳の中。圓火。飛去り
る。森三郎の。夢。幼。目。あつて。耳聳る
の。圓火と。耳聳る

牙^と現^られ^るも細^く告^げふ。聞^きくべくもあ^らぬ。若^しくハ
 亡^な失^はの^高思^ふと^いひ^ます。字^の工^もあ^らつ^た。耳^とさ^らう^まを
 も^あり。物^はう^けく^あら^り。風^の音^も。向^か山^越る^郭の^うた^へり^し
 りと啼^きま^らる。其^の一^声もあ^らう^と。再^もさ^らう^まる^れし^ま。さ^らへ^耳
 の^聞ゆ^りや。後^室の^亡失^の心^をう^り身^をた^らし^め。さ^らう^ねど
 今^も容^易に^捨て^られ^しと。さ^らう^と感^嘆せ^し。泪^をた^らし^め。
 幾^も瀬^が朱^は漆^りる^亡散^とい^はれ^し。何^れと^あら^し急^ぎぬ。
 第十七 太^兵農^夫と^債計^て瀬^戸川^を渡^る段[。]
 太^兵の^心も^幾瀬^は出^合。貯^の路^費も^あら^ず奪^りん^とあ^ら。
 二^つの^款の^枝茶^根と^立て^茶と^いは^れん^の心^をた^らし^め。非^道の^又り^し
 害^せし。袖^助の^追ひ^まる^をあ^らし^め。早^も瀬^戸川^へう^りた^ら

ば^おし^水増^し勢^ひ強^く。い^まも^とく^あり^しか。集^ひ居^る
 庄^家ホ^か備^へる^寄て。在^下ハ骨^董と^賣買^りて。活^か
 賈^とる^と。揚^州ハ名^高ハ太^兵と^りる^の心^を。相^州の^長者^の
 許^へ賣^つる^名器^{あり}て。下^まる^急ぎ^の旅^時ハ水^増し^水勢^盛
 盛^んる^れバ^マカ^よあ^らし^め。お^ん男^ホカ^情ハあ^らし^めん[。]
 渡^ると^あら^しめ^る。表^はか^いと^推量^す。急^ぎる^心を^たら^しめ^る。
 黄^金と^り厚^く報^へる^角の^中ハ別^の人^の方^{より}名^器も
 い^でる^が。お^のづ^かり^方の^名器^の障^りも^あら^しめ^る。
 夫^ゆえ^にこ^そを^表は^し。若^しハ袖^の追^ひま^るも^せん[。]
 や^と安^き心^もあ^らし^め。多^くの^金と^貯あ^る。踪^跡も^あら^しめ^る。
 農^夫ホ^か心^を惑^しめ^る。庄^家等^ハ情^態の^よめ^らし^める[。]



九之六巻六

あひまひと目と目を見合し。一位をえんまは。先か走
行く。竹知より一艘の小舟をりた荷ひ来る。太兵衛を助
川の邊は生骨の煮ゆる水練をひるものどもあれば赤裸と
るして小船の前後左右をさす。さす水とるもせど。難
るく向ひの岸は。太兵衛舟より飛び出たゆえんとるをを
追く駐つた。太兵衛舟へま塞り路を遮り。農夫ホロく罵り
母らうとる。やとまをりて。方便川を越る。一言の謝
とる。遁去らんとの何り。縁由ゆりゆりあらん。牙と
斯赤裸とる。やとま。と越る。黄金とりて厚く報ん
との約束もあらん。報ひる。一足由這地を退く。い
る。あつた。責けま。太兵衛。手とて。い

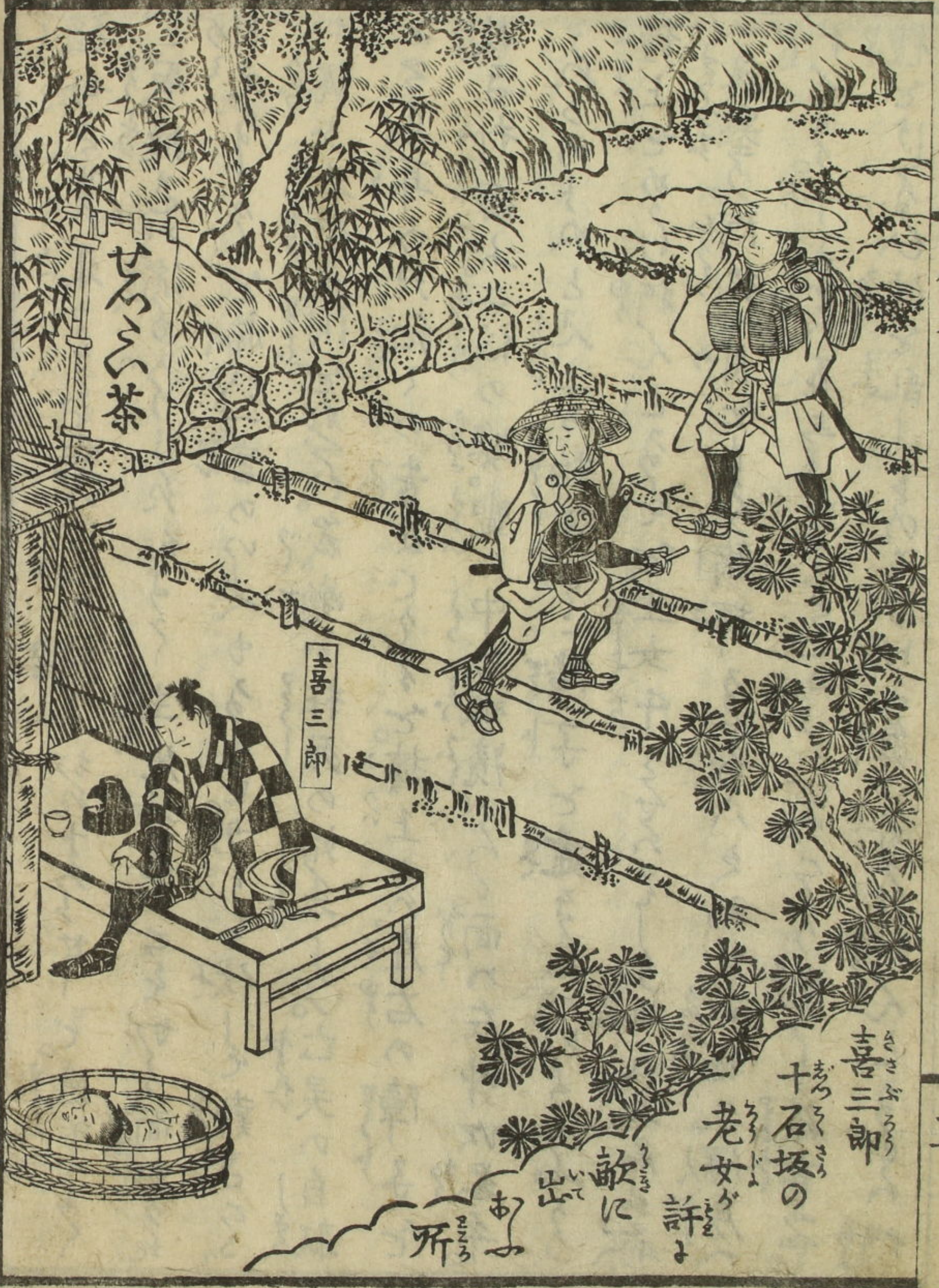
る。在下おん牙と方便をさす。只い。かま
走。と爽快もと責む。む。これ。い。報ん
金。あ。肌。所。持。多。品。嚮。あ。り。ど。大金
る。室の硯。相州の長者の。は黄金と換る。か
約定の。厚く報ひ。在下。か。帰。と。さ。し。と。り。と
うら。清。と。土民と。慢。う。咬。と。た。の。傷。言。ま。さ
べ。報。へ。黄金。多。所。持。多。と。室。と。や。ん。渡。と。左
る。引。提。へ。り。の。岸。へ。體。戻。え。と。あ。り。と。り。と。太兵
由。今。の。平。言。吐。と。も。報。と。り。の。肯。引。た。れ。復。状。ま。れ。威。の
刀。引。と。接。と。め。見。と。れ。ど。い。つ。初。見。と。強。人。と。罵。り。あ。ま
る。と。前。と。前。と。と。男。子。と。切。捨。と。ま。人。教。と。ま

人殺迹と云ふとと叫まはば向ふの岩彼所の畔より鉄鑊
と手獲雲霞のぞく群り集ひ出ると抜つ溜り千變万化
秘術を尽し幾へとも月よ余る勢は便も不得の公太兵
由生る中より危くし當下白龍次郎八由印南の一族掃
何泉の邊りと徘徊するべ。此地の住居も公かりと。太兵の跡と
慕ひ東國へりりたるよ。わづらも太兵が必死の場所へ行くら
必びぐらえよ想ひ片方より一松の古木の二尺すりありと
と根をとり振一羅とらとば。数々の農夫由其勢に猛る
は畏怖も散火は迹退る其際よ太兵を伴ふ行づき先由定
あるく。右と行きた左と迹山を傳ひ谷と幾迹を退るよ。鳥の羽
音も追人くと奔る足のももどまよとるさひさ。儂やく

道中程隔はば。ゆも此やとせられど目と体と堂社由るれと
愁ひ一が遙しよよ灯火の折くえちとバカをひいりた移て業
内とそよよ六十路あまりの老女立物く。いづらの者も深夜
尋ね問と不審一踪跡るは太兵懸念よ。どぬぬの道
踏さし強雅美よおびよよ一宿の隣とと垂とくと。或ハ
脚痛も不使るものよはばと愁気と口とやと偽り言説
ぬまば老女へを音引殊よ今宵ハヨか子の忌見と由定む
日の功德もゆるるん。おのつととととと。夜のあま
るのうや。いざやあつとせよの詞と臆とる色も。次郎八と
伴ひ太兵と上坐よ押さるを。老女の白龍か顔を打守る白龍
由老女の顔といゆるとよよ見詰る老女口を封じりひるるん

男ハ別れて程徑一が。人オホへべた由ありぬりか子あり。幼名を
左吉と云言う。下官もつが母と想ひ眼もあつたりしが去ま
ゆつが母ハ伊勢ニ在るといふるよといふと打消し。その不審
むらり。さればか子の死もせざりや。うも恙ありしとよろこびの
泪を流す。胸ありては初まう力量つう。農民の業を操り
もえ。さぐの是見えさうとぞありひ。父母をうち捨りて地へ土
まうし。人を分ち尋ねおしきど行脚まきど。りく死由
まうらんと。或も悔ひありひの歎き。出奔りし日の忌日と定め
年服の訪ひ吊りひ涙よまぬ日とぞある。緋かへん又之の
又まうしむひ。老女のカカおまれば汝が妹女を周州まうべ
ゆつて婢女よ出。おれ住馴し。繁花の地の渡世あるべ。當國よ

り種もうし。十石坂の此住居。住居の人のことわふ由と。
煎茶を人よ施さむ。由も善哉とあり。由親の子よ送す。む乃
うちどありけし。終て久し。死對面ふ種と積る話もあり。幸ひ
掘女由居合とれ。合えんとうとびうたりあり。さきも在り
おんこの後か。おの主人をとうとびうたり母の心をせむ。こ
白龍太兵由安堵ありていひる。おんこれ又惠の深
り色ハ疎畧あり。母人よ對月あり。もつが幸ひ。このおん
方の者の人由もつが。詳くよりい説き。おんけい。おん
と隠し。もあれば。後。とて。説き。在下か。生渡世
名ハ角熊の白龍。うらハといひ。若くは名を尋ね跡を追ふ
者あり。とくも。おん顔よ計ひ。おんけい。と懇めたのそらと。



カ之久巻六

十一

といふ。くひるた老女の牙るがら。由。斯一架。破と家由妻よ
 ろうての城郭もあつた。泥踏と踏立る。長者へ訴へる。これ
 月入せんと書心らう。由。道理よ責う。又極めざる
 よ。平すり。思慮う。死を悔ひ。折り。外。面。い
 声ありて。騒。千とを。形勢を視。農民。面
 面竹鎗を携へ。一位。先。進。男子。大音。瀬戸川
 おく人と。叙。此家。隠。忍。と。告。め。ありて。見
 れ。向。手。引。り。相。を。左。り。と
 支。さ。あ。あ。踏。理。不。足。り。知。己。の。み
 づ。ら。ひ。千。を。静。す。回。答。す。縁。由。り。其。中。一。位。乃
 ち。あ。る。一。篇。の。旅。人。三。人。今。宵。か。家。あり。其。中。一。位。乃

旅人衣裳は血の滲りたる。果しと人と害せり。ありと。くひる。由
 り。所。な。れ。ば。医。し。と。命。を。俱。は。る。益。の。み。よ
 お。り。り。り。附。添。ひ。衣。裳。は。血。の。滲。り。る。男子。と
 足。下。直。地。は。禁。の。繩。を。切。り。て。先。立。家。入。り。目。前
 衣。服。は。血。の。付。る。男子。居。り。農。民。亦。目。と。目。と。見。合。せ。お
 ち。さ。り。一。言。の。言。り。由。生。捕。る。得。の。喜。三。郎。由。不
 慮。の。難。し。何。れ。と。り。る。由。并。ど。只。忙。然。と。呆。れ。が。千。と。を。所
 握。と。竹。や。ん。低。結。懸。て。去。ら。し。む。ひ。お。ん。牙。の。と。は。あ。る。と。し
 為。と。も。あ。る。と。も。瀬。戸。川。あ。く。人。と。害。せ。り。の。お。ん。牙。と
 の。あ。り。る。衣。服。は。血。の。附。り。る。由。急。に。曇。る。牙。や。由。あ。る。と。し
 後。と。再。び。尋。ね。取。ら。し。む。と。り。る。を。今。ハ。彼。亦。よ。り。と。も。給。り。る

が身みの為ためありんと。残のこる所ところあり。教言しやくごんは太兵衛たへいゑいを福ふくひをひらき
中ちゆうへ。数多あまたの農夫のうふうは前後ぜんごと問とひ。厚あつく謝まがひ退ひき。あつと
するも。妹女いまいめと振放ふるはなし。太兵衛たへいゑいは跡あとと追おひ行ゆくと。母はは
千ちと存ぞんの腹はらより。短刀たんとうと抜ぬき。白龍はくりゆうは裾すそと突つき。と
さめり。入いる。は。女め。中ちゆうより。び。ぎ。の。身み。ど。り。面おもてと。く。び。ぎ。行ゆく。さ
ひ。ぎ。と。さ。め。ぬ。不ふ得とくの。白龍はくりゆうも。又またと。り。裾すそと。取とり。絶たつ。け。れ
り。ん。と。も。と。ぶ。る。右みぎ下した左ひだり仲な次つぎは。躬まが方かたあり。と。も。彼かれが。宝たから珠たまと。奪うば
り。ん。と。め。た。り。と。と。さ。ま。ま。さ。う。く。妙たう法ぽうつ。と。せ。ど。荒あらいま。る。バ。現まと。碎くだん
る。と。と。と。ひ。延えん行ぎやうせ。り。今いま彼かれが。千ちより。賣うり。た。せ。ど。か。出い世せの。結むすと
失しつ。と。よ。あ。り。と。や。ま。や。放はなち。ま。う。と。り。る。も。耳みみも。止とど。ま。り。り
泥どろと。さ。る。的てきと。さ。る。もの。の。あ。り。た。れ。ど。死しよ。う。て。言いべ。さ。る。もの。の。信しん

るありと。短刀たんとうが。咽のどり。と。突貫つとく。と。る。も。り。悪行あくぎやう盛さか人の。白龍はくりゆう
も。周章しゆうぢやうふ。と。め。死し。る。よ。も。急いその。自害じがいと。加かす。阿あ梶かぢも。と。と。と。り
追おひ。と。く。の。や。り。千ちと。男おとこの。う。り。死し。声こゑ音ねあり。と。中ちゆうへ。印南いんなん六む三さんと
の。保見ほけん岡平おかへいの。大悪人おほあくじん。主しゆと。教しやくし。金かねと。奪うばひ。印南いんなんの。家いへの。刀かたな
ま。で。と。取とり。と。ち。の。死し。名なも。白龍はくりゆうと。改かへめ。姿容すがようと。習しやくる。と。も。あ。い。て
天てん道だうは。免めんし。み。り。ん。の。上うへも。死し。大罪おほいざいも。急いそ。天てんも。人ひとも。憎にくむ。と。つ。と。り。
今いま止とど。ま。り。街まちの。風貌ふうぼう。と。う。ん。か。生なまし。左ひだり吉きちと。神かみも。あ。り。牙はの。ち。も
さ。い。の。悪あく子こと。持もちし。親おやの。死し。の。り。と。り。と。人ひとと。俱ともに。縁ゆかりと。言いふ
口くちの。今いま更さらふ。ふ。と。死し。う。ね。う。る。面おもて目めも。さ。天てんの。罰ばつの。遠とほく。と。代しろ憂うれた
め。死し。ん。か。悲かなし。と。愁しゆう気き。自害じがいと。り。と。愧かたじけと。雪ゆき死し。は。女めへ。未ま期きの
見けんの。仕しも。あ。り。所ところ詮せん道だうと。ぬ。天てんの。綱つな。と。て。由よし非ひ命めいと。死し。と。り



下南
ろくのま
上之助
敵左仲二
ろんきこ

二郎八

三三郎

左之助



三三郎

三三郎

三三郎

カ
三
六
三
六

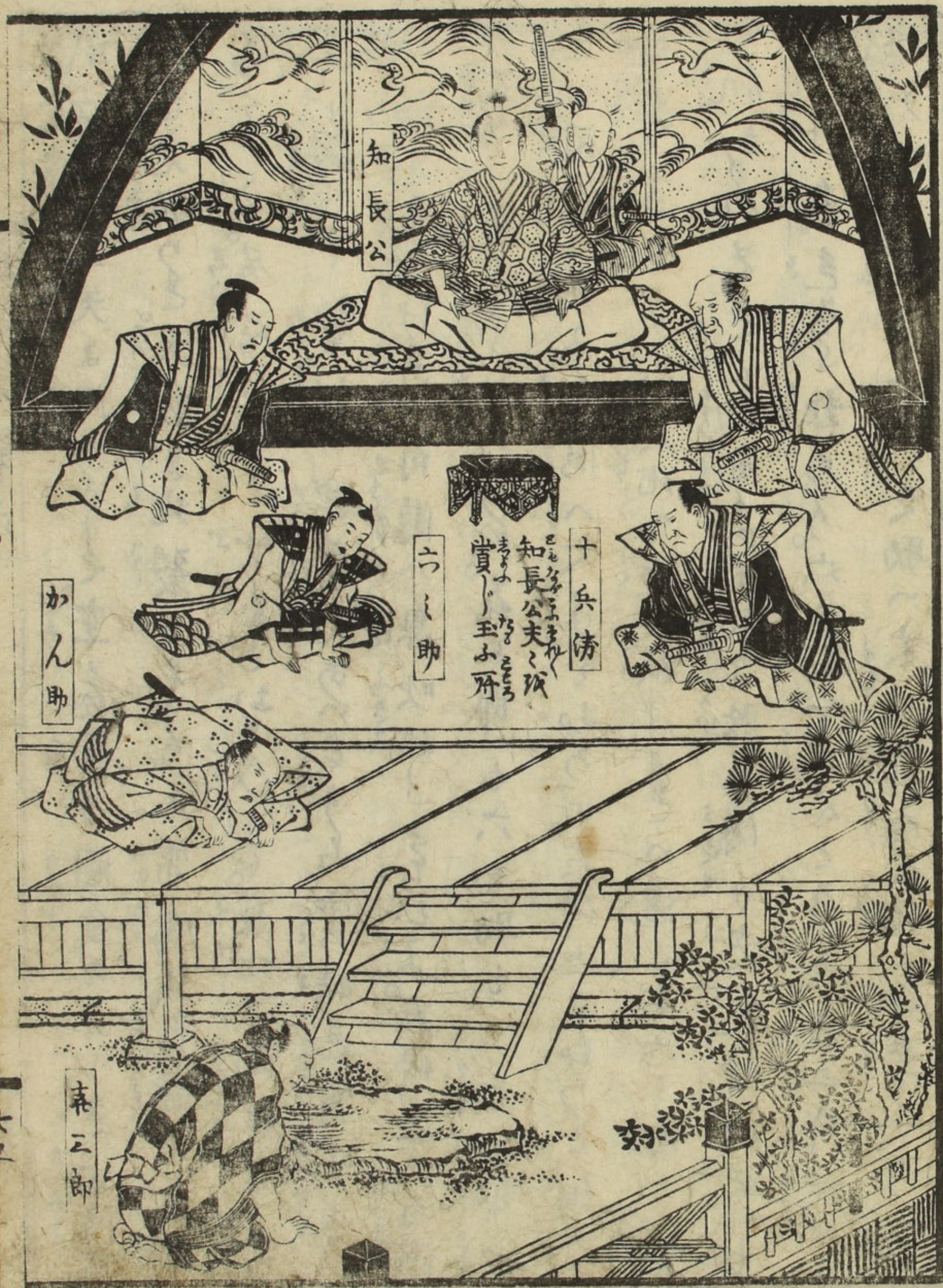
ナ
一

牙と六之助とすまは撃きさるべ。未だの罪由怪くんと。ひひも
 皆祝の慈悲。白龍ハヤ聞く居らう。か。愁傷みせる光景由
 る。母の教。か牙の破滅。六之助由打殺し。左仲次が持し
 宝硯と奪ひ。青雲の種とる。とる。行んとる。と阿提乃
 さく。向方へけ。此方へ。行ど。う。女子由真実の血とら。
 後より。むつと。組。苗。め。兄。母。の死。異見とる。
 露。む。り。由。何。と。牙。の。阿。提。乃。阿。提。乃。の。ウ。ま。
 ち。て。引。さ。く。服。胎。へ。掌。の。當。牙。阿。提。乃。阿。提。乃。の。ウ。ま。
 一。倒。の。も。ん。く。ど。い。ち。足。一。出。奔。る。か。て。太。兵。ハ。千。と。せ
 か。教。は。仁。せ。考。く。の。農。夫。は。前。後。を。田。を。狐。が。先。へ。行。き。本。津
 勘。助。は。對。目。あり。おん。牙。の。姑。千。と。せ。さ。く。ぐ。の。教。は。一。福。を

おん。牙。は。任。ま。さ。る。は。な。さ。く。ひ。く。さ。う。と。所。持。の。宝。硯。を。出。し
 勘。助。は。遍。よ。し。ぬ。勘。助。ら。う。肯。引。安。快。さ。う。め。奥。深。き
 へ。へ。程。さ。く。出。太。兵。を。誘。ひ。幕。の。うち。ま。り。さ。る。中。へ
 連。行。し。魏。々。堂。々。の。形。勢。な。れ。ば。ひ。く。さ。く。廻。る。長。者。の
 家。士。も。上。坐。は。床。几。の。ま。り。儼。然。と。る。次。る。と。入。り。
 船。載。重。兵。衛。る。ま。は。仰。天。す。か。牙。の。と。胸。は。的。一。外
 由。出。さ。ん。と。お。り。く。ど。も。数。多。の。固。め。は。蟻。の。出。べ。き。空。虚。由。る。と。
 安。く。さ。り。し。重。兵。衛。声。あ。ら。う。は。汝。骨。董。浦。と。あ。ま。り。目
 利。ら。う。む。り。の。あ。り。と。く。懐。中。より。一。つ。の。小。柄。さ。り。出。え。と。り
 一。左。仲。次。も。顔。色。土。の。ど。ろ。は。変。じ。さ。る。か。生。し。る。人。と。由。見
 ざ。り。ぬ。重。兵。衛。撲。地。と。白。眼。僕。部。左。仲。次。の。滾。賊。牙。太。兵。が

名を借り死しつと傳り。いひ觸るとも由らむ。牙の如く所ある
 べし。相より津領のその小柄おぼえどあらん。先の年橋津を
 保見袖助へうちけし。後日の證據とてが干はる。おのことてが
 名を新の愚さ。今長者の助力より。幼き六之助をいよく
 仇討の勝負るさむ。そやと指揮は本津助助の六之助をいよく
 出せ。森三郎は補らる。向方より。扱ぬ。聽て勸助の教く
 いく衣服大小を廣蓋へ我せ。左仲次が前へおれ。や左仲次
 が姑千とせ。一子白龍は弱き。行状よりくる。汝が代り
 森三郎を禁め。赤紗をえせ取り。迹とせ。ささめ。農夫は路次
 と囲せ。その所へおびきよせ。やとく宝観を取り。突し。を千とせと
 在下か。ろくひん。あつる。や。おん牙。臆く。遁せんとする。ととも。

今舊悪分明る。之へ所詮逃せんとする。とも甲斐る。ら
 ん。主人重兵衛よりの賜物受納る。えの武まは立ぬ。
 繁く勝負あふ。と勵ま。左仲次も千とせが俵計
 であら。口惜く。おれども。不得。大悪の。ろくひん。よ
 せ。衣服を着。一討せん。と氣を。向ひぬ。森
 三郎ハ六之助を前。立。は。漢部。左仲次より。え。これ
 へせ。これ六三郎が保見袖助あり。汝が手裡。劍耳
 よ。耳聾と。その。悪人。よ。主人の。片割。よ
 手向ひる。片腕を切り。名も腕の。森三郎と。あ。よ
 汝。これを害せん。と。椽の下家より。曾平。よ。刺。よ。汝
 か。所為。らん。あ。よ。幼子。ハ。主人。六三郎。か。一子



六之助とて勲助との神崎の花街よりとある。福鳥
 家清兵衛といひていふ。実とて守り三月ら也。今會
 誓の羞と雪の幸とある。ぬ主人六三郎と併り也。その後
 淡木長庵と密計り。鬼原源之丞との毒薬をとりせ。
 汝がため小室の自害主母をて非道の双と殺し。その積怨
 片腕るが。在下助太刀あり。幼主と討ちあひる。覚悟せよと誓ひ
 せ。左仲次へ呵々とおぼせ笑ひ。その期におび回るる。と由
 る。返討覚悟せよといひさま切つけ。とゆらうと三郎受
 とめ。影とる。日向とる。六之助は人係あり。十二三合戦ひ
 と死。白龍次郎八韋駄天走り又駈つ死制する。その死投散に
 幕の中へ入りし。と曲者と聞き強き争ひし。俄に幕

かの子の悪と悲にて死せりとの教訓由空つて風の吹入りなど。
慾眼くも此所くまりしよ。もうもれ像の天妻岡迄をせしの中よ。
様戸が怨鬼と主母幾休とすとも母千とせと左右は後口鏡と
妻くの人と殺しとも。まごもど根つとも道もぬ恨もあづ。け
く仇多えんとあどさくも。もも俱も黄泉の鬼とあつたけ
さどおくべきと。幾瀬とすも母も。子孫とありよの為。中右よ
まよひ争ひもひ安さひひあやしく。了得の様戸が冤鬼も道理
よ責らる角を折り。忽地解る恨の教どのす。三人の亡霊ハ。罪
備とさくうせるとつらと息吹くせ。此胸の闇夜と出し中し晴
とるよとさくひ。しが鬼の罪のつれと責後悔もとも。淫多れ大罪
はの室よ上る月も。六々助もそのおん手よめらば。せめてものおわり

黄泉の亡主人が。母も成仏はるごとくも。草茶のわけて
が。同保見のその中よ袖助どのの主のさめ。時人ともせなる
うた苦学。様戸が冤鬼よ悪人とんせと。ま扱りま。口惜しやと
腹さくしと。つらと此くの願ひも。保見も。由又口の敵とあ
乃も若んる。袖助らぬま。ひてと。大悪くつと。言る。袖助
ハ侯とんる。いろとろも。岡平が後悔も。様戸が恨も。印
南の一族絶えんとの幾瀬とすの亡霊の。これも昔のありれ。前
合る。不便とや。怨ひも。君父の仇も。用捨のあづ。と
と。六々助も。手とら。岡平が前打落と。二の首で親族の墓
前。手向あづ。と。重兵衛が見る。長者の家。土も。厚
く。謝せ。めら。や。仇討の主人も。さ。感。激。は。互。ひ

よ式礼目礼多 別送り候。

第十八 印南六之助本地へつる段

去程は船越重兵衛ハ當國の長者の助力より、仇討の首尾
整ひしを厚く謝し、六之助ハ三郎を周別法義へ伴ふ主君高
津新左衛門知長の面前より、一部始終を披露す。宝殿
と六之助が辛より見あげさせられ、知長も満腹あり。残
るは、六之助と、重兵衛と賞し家恩を賜ふ。六之助ハ印南
の家督相遠く、本津勘助腕の長三郎と直系とあり、
六之助を仰ぎ、勘助ハあつた思と謝せり。六三郎ハ肯
引いて、いひ、わが類ひ、さるる、か、微運、まよ、なれ、妻子、
別送、生、く、ひ、も、な、れ、身、の、く、も、今、更、は、自、殺、す、も、の、も、大、死、は、似、し、り。



腕に喜三郎
別送

行枝と名

ちとせ

さへか

十八

作者

梅暮里谷岷



江戸

歌川豊國



畫工

歌川國房



筆耕

皎憲武筭



彫工

好靜堂綱之乃

梅暮里谷岷編著

新波遠說七長職

全部 九冊

蘭齋北嵩畫圖

跋

荀卿曰聖人道會萃

哉夫大鵬搏翮飛昇

歟

和漢小說紛

闕

辨亭真人之著作

子也世之為者... 既且其宏
 翅比之何可... 從前為斷
 西來意... 而開口一
 蒞天黃吻... 言聊記
 言聊記... 言之... 唐

子也世之為者以為跋

文化未七龍

集小者維大荒落季春

也之曰步軒

也之曰步龍



おもしろい後編 全卷六冊近刻 柳亭種彦著
 一名志しりし物語 志満地書画

巴之虫達則か許へりし人々之達則を叙し合説なりと
 如後かきし星氣主重の法悪寄居虫袖をきりて花柳を
 中じうに叙せしつ新説よりつ姉の姿をいふる曲事つて四つ合
 世に新しきもの日雲の母恋のゆき又達則の徒に二編をまて巻の烟の再び
 空の中を常事なれば海にゆきて編の巻を感懐の狂言を其前編の巻より一
 文更だは後編の巻より目序幕より天のついでがき

奴ごのこ小こおんせん前ぜん後ご 種彦作 桃川画 全四冊

近世きんせい 霜しも夜よのの星ほし 同作 北斎画 全五冊

東金とうきん 藻も左さ門もん 金きん花はな夕ゆふ映えい 谷峨作 北斎画 全五冊

浅間あさま嶽たけ傍わらわ小こ子こ 種彦作 前映 北斎画 全三冊

江戸 馬喰町三丁目 若林清兵衛

文化八年歲在辛未春正月發販

書肆 外神田 御成道 山崎平八



如...

書

天...

...

...

...

...

...

...

...

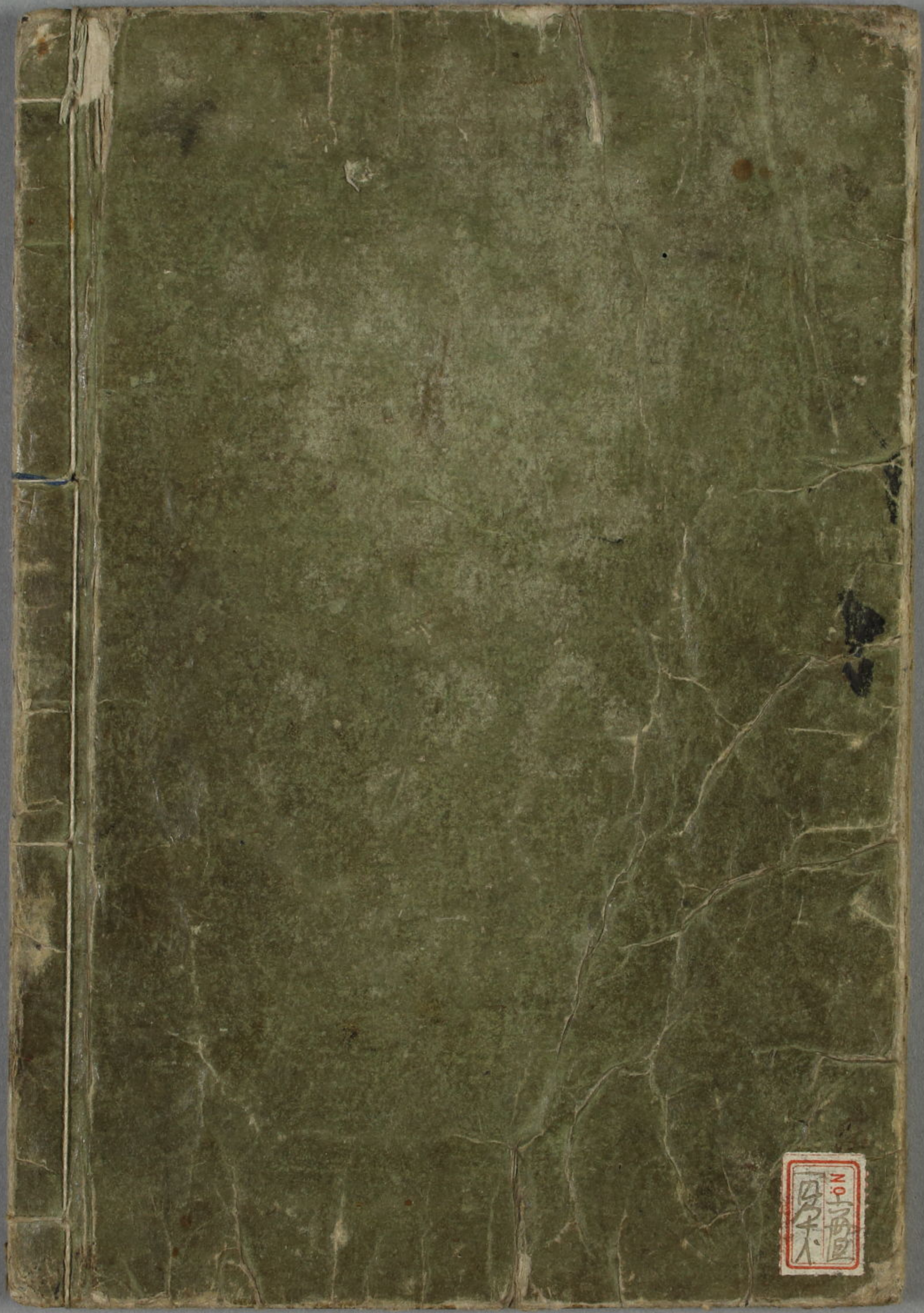
...

...

...

...





20
四庫全書